

# 会報

## 第6号

北海道高等学校世界史研究会

事務局 北海道札幌平岸高等学校

062-0935札幌市豊平区平岸5条18丁目

TEL 011-812-2010

FAX 011-812-2049

### 高世研30周年を迎えるにあたり

北海道高等学校世界史研究会

会長 久富 壽

(札幌豊明養護学校校長)

1999年の新年を迎え、20世紀もいよいよ今・明年を残すのみとなりました。21世紀に入ると早々に学校完全週5日制と新学習指導要領の実施が予定されていますが、日本の社会全体から見れば、ここ数年の深刻な経済不況は、21世紀に対する明るい展望を我々に抱かせるには至らないのが現実ではないでしょうか。この1年を振り返ってみると、ヨーロッパでは欧州通貨統合がようやく実施に移され、ヨーロッパの統一が更に加速される感があります。しかしアジア諸国やロシアの経済が破綻状態となり、超大国アメリカは経済の好況を持続しながらも、クリントン大統領の不倫疑惑で終始し、最後に米英軍によるイラク空爆で終わり、国連や世界各国間の不協和音のみが一段と高まった感があります。

ところで、今年は、北海道高等学校世界史研究会が発足して30年の節目を迎える年に当たります。本研究会が発足した1970(昭和45年)は、高校紛争がピークに達した年でもあり、この年3月、警視庁は全国で「354高校の卒業式紛争で検挙者50名」と発表し、ある学校の卒業式答辞で、「現在ほとんどの講座において、先生方は十年一日のごとく同一の事項を同一の抑揚で語り、その言葉は私たちの耳元をかすめるばかりで何ら私達の心を喚起しない」と述べ、教師や授業内容の批判も盛んであった。そのような状況の中、8月札幌都心部の信託銀行の会議室で、札幌旭丘高校職員芳司校長(当時)を会長に、開成高校石川哲郎先生を事務局長に第一回研究会が開催された。以来30年、歴代会長をはじめ役員・事務局の方々のご尽力と会員各位のご支援に支えられて、今日を迎えることになりました。

本年は、30周年記念大会となるため、「世界史における民族問題」をテーマに、内外の第一線で活躍されている研究者を講師に迎えるなど、事務局を中心に鋭意企画を進めております。世界史や日本史担当の先生方、また、広く歴史や民族に興味をお持ちの方々など多数のご参加を期待しております。どうぞよろしくお願いたします。

## 第 2 9 回 研 究 大 会 記 録

日 時 平成 1 0 年 8 月 6 日 (水)  
会 場 札幌西高等学校 輔仁会館

講 演 八尾師 誠 氏 (東京外国語大学外国語学部教授)  
研究発表 今井 一吉 氏 (北海道美唄工業高等学校教諭)  
佐々木寿雄 氏 (北海道根室高等学校教諭)  
司 会 千田 周二 氏 (北海道興部高等学校教諭)  
出口 敬智 氏 (北海道札幌月寒高等学校教諭)  
記 録 佐野 祐子 氏 (北海道静内高等学校教諭)  
菊池 真哉 氏 (北海道札幌白陵高等学校教諭)

### 講 演

### 「世界史における『民族』と今日的問題状況 としての『民族』」

東京外国語大学  
外国語学部教授  
八尾師 誠氏

3年程前から大学で教養科目の「民族問題」に関して研究を進めていた。世界的にも民族問題は注目されている。日本でも、1995年に平凡社から『世界民族問題事典』が発刊され、現在弘文堂『世界民族事典』が計画されている。今回は、私もある高校世界史の教科書を担当し、今現実的な状況の中で問題になっている民族と、高校世界史の教科書の中の「民族」がどう問われているかを関連付けながら、話を進める。

第一部として、私が関わった範囲の「高校世界史教科書にみる『民族』」をめぐる問題、第二部として、その関係で専門の中東、特にイランにおける民族、具体的に言うと「イラ

ン人」の枠組みについて考えてみたい。教科書で「民族」をどのように定義しているか。多くは「民族・人種・語族(系)」の3つに分類し、言語・宗教・社会的慣習等、広い意味での文化的伝統を同じくする集団と説明する。

実際教科書の中で「民族」がどう使われ、どんな問題点があるかを検討する。内容は表記形式をめぐる問題と意味内容をめぐる問題に分けられる。

表記形式について、「～人」「～族」、何もついていないもの、中国風の「～部」と表記されているものがある。気になるのは、「～人」「～族」表記の違いである。例えばゲルマン民族と総称される諸集団に関して「ゲルマニア」「ガリア戦記」のような史料から、彼等が「部族」的な構成をとっていたので「族」とつけている、という説明がある。しかし「何が部族か」は人によって違う。部族とは、地域によって何を部族と呼ぶのか違う実情がある以上、特に世界史の枠内で見ると場合「族」表現にこだわることで問題・誤解を産む。また、一般に「～族」「～人」の使い分けが見られるが、「アヴァール」という集団に対して、教科書によって「アヴァ

ール人」「アヴァール族」とばらつきが見られる。慣用だが、教わる側は気になる所である。また、ある集団に「～人」と使い、ある集団に「～族」を使う、ある種決まった用法がある。慣用に隠れた一種の偏見がある。使う側の価値観から、文明化されない集団に対し「族」と使い、そうでない集団に対して「人」と使う傾向がある。さらに「～系」という表現。「アジア系」はアジア地域出身の意味か、その地域の人種かが分からない。

次に、特に中国史に関して、固有名詞が民族名称なのか、王朝名か、地名が分からない例がある。「ウイグル」「西方の吐蕃」「雲南地方におこった南詔」は固有名詞か民族名称なのか。吐蕃や南詔は一般に国名や王朝名として使われている。教科書間でも何の名称で使っているのか分からない例が多くある。

次に意味内容をめぐる問題である。民族として語られている集団、ここでは「カッシート」を挙げたが、多くの教科書で具体的に「民族」とされている。しかし彼らがインド＝ヨーロッパ系である、と説明され、語族や語系の話になってしまうのに「民族」として語られる。少なくとも時代的に古い方については、ほぼ例外なくそうであろうと思う。

一方、同じ「民族」で語られているにもかかわらず、近現代以降になると「国民」の意味で使われる事例がある。「ヴェトナム人」は古くは「民族」と語られるが、新しい方になると「ヴェトナム国民」の意味である。事実、現在のヴェトナムは多民族国家で、多数を占めるキン族をはじめ54の民族を公認している。「ヴェトナム国民」を「ヴェトナム人」と言うならば、「ヴェトナム人」の内訳は54の民族からなっている。

次に、時代によって表現は同じでも意味している内容が違っている例である。多くの教科書で古代エジプトの人々を指すのに「エジプト人」と表現しているが、そこで意味される「エジプト人」の内容と、近現代における

「国民国家エジプトのメンバー」を意味する「エジプト人」とは内容が違う。「民族」と「国民」とが混同されている。

今回私が参考にした教科書で「インド人」という表現は「民族」という用語で使っているわけではないが、やはり「インド人」とできると、インドの言語・文化などを同じくする集団という枠の中で「インド人」を考えがちだと思う。

「…インド国民会議派を中心とした民族運動は…」なる表現がある一方「…ティラクラの民族的指導者は…」という表現がある。民族運動・民族的指導者・民族意識、すなわち「民族」という言葉を使った表現と並行して「インド人」という表現が一方であると、「インド人」という民族が存在するかのようにとらえられてしまう。インドは多民族国家だから、「インド人」という民族は存在しない。

この事には理由がある。教科書レベルにおける問題も含め、なぜこのような疑問がでてくるのか、私なりにまとめると次のようになる。

「民族」という言葉が日本語の中で使われたのは、決して古い事ではない。1930年代、柳田国男あたりが使ったらしい。しかし現在、日本語の中に「民族」が定着している。従来「民族」の言葉で語られた状況と、現在の「民族」の言葉で語られる状況に大きな差が生じている。従来は、19世紀以来我々が政治生活の基本と考える「国民国家」が人類の政治生活の理想とされた。

現在、状況はそうではない。世界中で起きている「民族」「民族問題」から判断すると、現在の国家、具体的には国民国家だが、これは民族にとってすでに初めから与えられている枠組みである。民族が自己を主張するとその国家はどうしても民族との間に摩擦を生じる。かつては民族が国家をつくるのが正しいという流れがあった。しかし、国民国家の枠

組みが民族を否応なく作り出す状況なのではないか。だからかつては国民は民族でもあり得たが、今やそうではない。

英語のNationを日本語に移すときに時に国民と訳し、時に民族と訳し、時に国家と訳した。今やNationを訳すとき時、国民と民族が相互互換的に用いられる状況ではない。にもかかわらず、先程の「…インドにおける民族運動は…」とか「…民族的指導者は…」 「…民族意識…」という表現は、当然NationあるいはNationalismを訳している。「国民運動」と訳さなければならない所を「民族運動」という日本語にした。その状況が教科書に反映されている。

次にイランの話に移る。「イラン人」とは誰か？という漠然とした、にもかかわらず現在の状況からするならば基本的な問題である。『イラン近代の原像』（東京大学出版会、1998）の中で議論した点である。

まず「イラン人」という言葉が教科書の中でどう使われているか、から見ていく。

教科書Aでは「インド＝ヨーロッパ語系に属するペルシア人のアケメネス朝ペルシアの自立によって終止符が打たれた。」とある。次に「セルジューク朝の支配層は…実際の統治行政にあたったのはイラン人官僚たちであった。」続いて「ガザン＝ハンの時代にイラン人宰相ラシード＝アッディーンが…」とでてくる。ここでは「イラン人」と「ペルシア人」という2通りがでてくる。「イラン人」の用例として「ペルシア人」も拾ってみたのだが、実はこれが大きな問題である。別の用例を見ると、アケメネス朝ペルシアについて「…インド＝ヨーロッパ系のペルシア人（イラン人）…」とある。（イラン人）であるところのペルシア人が「…領土内の諸民族の文化を統合して…」という説明もある。同じ教科書で、イラン（ペルシア）人とある。イラン（ペルシア）人に註がついている。「イランがペルシア語でアーリヤ人を意味するの

に対し、ペルシアはアケメネス朝の故地フールスに由来する呼称」という説明である。しかしイランがペルシア語でアーリヤ人を意味するというのは間違いで、「イラン」が「アーリア人の土地」の意味で「アーリア人そのもの」を指すのではない。パルチアを「…遊牧イラン人の族長…」とし、ササン朝について「…イラン人のササン朝に滅ぼされた。…」とある。その説明で「…『イラン人および非イラン人の諸王の王』という称号を用い…」と碑文の文言を引く。しかし元々の碑文には「イラン人および非イラン人」ではなく、「イランおよび非イラン」と書いてある。「人」ではない。実は全然意味合いが違い、誤解を招きかねない。次に「…サファヴィー朝は…イラン人民族意識の高揚につとめた。…」とある。別の教科書も「…メディアと同じインド＝ヨーロッパ系イラン人の国であるペルシアは、…」とある。

「イラン」と「ペルシア」という表現は単なる「ある時代から言い方が変わった」という話ではない。教科書ではイラン人とペルシア人はイコールで結ばれると考えている。パルチア、ササン朝ペルシアについてイラン民族の国家と説明している。イラン民族の国家としてパルチア王国、あるいはササン朝ペルシアの例を挙げている。セルジューク朝では「…官僚にはイラン人が登用され、…イラン人宰相のニザーム＝アルムルク…」とでてくる。

実際に現在のイラン・イスラム共和国の内訳を見る。現在のイラン人は、イランという国民国家のメンバーという意味になる。

イラン国民の内訳を言葉に従って分けると、多い順に現地の言葉、ペルシア語で言うフールスと称している人々、これが日本語に訳せばペルシア人である。45.6%。現地人がアーゼルバイジャーニー（Azarbayjani）あるいはトルク（tork）と表現する人々、16.8%。

現地人がホルドゥ (kord) と表現する人、日本語で言えばクルド人だが、9.1%。アラブ ('arab) 日本語ではアラブ人となっているが、2.2%。視点を変えて宗派・宗旨別に見ていく。イスラム教徒が大多数を占め、シーア派が91%。スンナ派が7.8%。それ以外のキリスト教徒、ユダヤ教徒、ゾロアスター教徒あるいはその他。つまり言語別でペルシア人と分類される人々を宗教別に見るとシーア派もいればスンナ派の人もいる。ゾロアスター教徒も日常的にペルシア語を話しているペルシア人である。さらにイランに住んでいるユダヤ教徒も、基本的にはペルシア語を話すので、その限りではペルシア人である。宗教枠で見えていくとユダヤ教徒はあくまでもユダヤ教徒で、ペルシア人とは明らかに違うという意識を持つ。このことが他のトルコ語系の諸集団についても言える。少なくとも現在において、イラン人を構成する半分位の人たちがペルシア人と呼ばれる人たちである。

次にイラン人とペルシア人という枠組みについて。現在は、日本語で「イラン人」は「イラン・イスラム共和国の国民」の意味で使う。イランから来た人々がイラン人であると答える。その根拠は日本に住んでいる以上、不法残留しようともイランのパスポートを所持している、つまりイラン・イスラム共和国という国民国家のパスポートを所持している意味で自らの意識としてイラン人ということになる。ところが、一方でイラン人の内訳にファールスがいる。日本語にすればペルシア人としか言いようのない人たちである。今でもペルシア語を母語にする人々のことである。当然、「イランあるいはイラン人」という表現の仕方と、「ペルシア語」という表現の仕方との齟齬が問題になる。

言語学上イラン語という表現がある。正式な名称はイラン語派という。インド＝ヨーロッパ語族を構成する一つのグループで、イラン語の中にペルシア語もあればタジク語もあ

ればクルド語もある。だから、イラン人＝ペルシア人ではないのと同じように、ペルシア語はイラン語の一種で、ペルシア語＝イラン語ではない。

イランという国の人がイラン人であるならば、昔ペルシアといった国の人はペルシア人なのか。現在における意味合いと歴史的な意味合いを分けて考えざるを得ない。歴史的にはこの国の名前・国号をペルシアからイランに改めたのではない。イランの側では自分の国のことをペルシアと称したことは一度もない。ヨーロッパ人がペルシアと呼ぶので、そうではない、正式な呼び方はイランと言うのだ、ということを経済的に1935年に正式に表明した。改めたのでなく、正式に表明した。イラン人という表現は、歴史的に古いものではない。

一方ヨーロッパ人は何をもってペルシア人と称してきたか。現在のイラン南方にシーラーズという町がある。ここを中心とした地方の名称がファールスである。アラビア語でパールスになる。ファールスあるいはパールスという地名、地域名が、この地域から勃興したアケメネス朝により現在のイラン全土を政治的に統合する。つまり、ペルシアという小さな一地方から起こったアケメネス朝が、その周辺の地域を統合した。さらにその外部の人間がその全体をペルシアと呼んだ。ヘロドトスはアケメネス朝の支配領域全体をペルシアと呼んだ。ペルシアと呼ばれる地域に住んでいる人間のことをペルシア人と呼んだ。

イラン・イスラム共和国という国のメンバーという意味でのイラン人は、では歴史的に、国民国家ができる前はどうかだったのか。イランという言葉がそもそもどういう意味かということは、イラン人を考える時に大事になってくる。この言葉自体、もともと「アーリア人の国」の意味だという通説がある。仮に現在イランと呼ばれている所が、本来アーリア人が住みあるいは移住して、非常に有力であったが故に、あたかもアーリア人の国という

ような意味合いでそのように呼ばれたとしても、現在の学問状況で分かっていることは、アーリア人が住んでいたと思われる時代、アーリア語系の様々な言葉・言語あるいは方言を話す人々もいた、ということにすぎない。現在史料の上から確認されることは、イスラム期以降、7世紀以降サファヴィー朝期末期くらいまで、どんな史料にも、イランという言葉や「地理的概念」あるいは「地域名称」以外で使っている例はない。イランとはあくまで地名で、「イラン国」の意味合いで使っている例はない。イラン人とは当然、言語である。

ペルシア語で「イラン」という表現と、日本語の「イラン人」に相当する表現がある。「イーラーニー」という表現になる。では「イラン」と「イーラーニー」の関係はどうか。「イーラーニー」はあくまで「イランの人」、つまりイランに住んでいる人、あるいはイランに関わる人、という意味でしかない。イランに現在住んでいる人は歴史的に長い間かかって出来たはずである。単にイランという地理的な範囲、あるいは地域に住んでいる、あるいは関わっている人という意味である。従って、「イーラーニー」が意味しているのは、イランに住んでいる言語・宗教・風俗・習慣などを意味する集団が住んでいた、歴史的にもその総称でしかない、ということである。

一方、ペルシアに対するペルシア人というのも同じことである。ペルシアとヨーロッパ人が勝手に呼んだ所に住んでいた、あるいはそこからやって来た、あるいはそこに関わっていた人々を彼らはペルシア人と称してきた。歴史的にそう称してくるうちに、本来多様な人々がいたにもかかわらず、歴史的にずっとそう称し続けてくることによって、あたかもペルシア人という民族的な、言語とか宗教とかを同じくする一つの集団であるかのような誤解が生じている。その意味で、教科書の観

点からしても、民族としてのペルシア人は存在する。歴史的に、ペルシア語を母語にする人々はいた。民族としてのイラン人は歴史的にも、現在も存在したことはない、という結論になる。

(質疑応答)

Q ; 民族における血筋の問題がふれられていないように思うが。(釧路北陽 窪田)

A ; 今日の話はあくまで世界史教科書にどう書いてあるかという限定で話した。同じ民族という言葉で語っていても、その中身が大きく変化している。私は、これまで客観的な指標に基づいて民族を考えてきた。ところが現在ご質問の様に、客観的指標に加え、あるいはそれ以上に自分自身が何者であるかという主観的指標、つまりアイデンティティをどこに求めるかが、現在民族を考える時に大変大きなウェイトを占めていると思う。自分が自分を何者であるかと考える根拠は様々である。

従来言われてきた言葉・宗教・風俗・習慣に加え、民族概念と人種概念は違うとは言いながら、人種的なものをもって自分が何者であるかと考えることがある。つまり議論の次元が違うということだと思う。

Q . パフレヴィー政権に関連して。イラン民族の性質はむしろ内向的と考えるが、パフレヴィー朝では柔軟に見える。本来のイラン民族はどういう性格を持った民族なのか。

(札幌厚別 井上)

A . 「本来のイラン人」という言い方自体がイデオロギーだということである。つまりイラン民族というのは一度も存在したことはないという言い方をしたが、その様に言う理由は今申し上げた通りである。もう一つ、イラン民族なるものをパフレヴィー時代にはことさらに言ってきた。それはパフレヴィー時代の一つのイデオロギーだということである。つまり元々のイラン人がこうだとか、イスラ

ム以前からイラン人はこういう伝統を持っていたという語り方がパフレヴィー時代のイデオロギーである。実は元々イラン人はこんなのだという表現は、裏返せばイスラムは後から入ってきたものだという考え方である。まさにパフレヴィー時代には、イスラムを社会から排除していく理由付けにその様な言い方をしたと私は考えている。更に言うと、今日はイランの事例に即してお話したが、「～人の元々は?」「～人の本質は?」という言い方自体問題ではないかと考えている。

Q. 異民族間の結婚は行なわれているのか。

(札幌光星 真島)

A. 20年近くイランを行き来している私の個人的な印象で言うと、要するに、ペルシア人がおりアゼルバイジャン人・トルコ人・クルド人・アラブ人などがいるという言い方をした。これは説明の便宜上という風に考えて頂くといい。説明する時には一応分けてみるが、分けることが現実に普通の形だと考えることは全然ない。今の質問に答えるとすれば、私が知っている限り、ペルシア人とトルコ人あるいはクルド人で通婚も行なわれている。イランという「国民国家」の中でのイラン人としてのまとまり・意識は現在も強くなっていると考えている。違う集団であればその間で誤解・差別などが当然あるが、イラン人全体としてのまとまりとして事は動いていると考えている。障害がある例を出すとすれば、宗教が違うと難しいかもしれない。

Q. 将来「民族」の定義は変わるのか。

(紋別北 野村)

A. 同じ「民族」という言葉で表現されるにもかかわらず、その中身はいろいろばらつきがあるという話をした。これはたまたま、我々は今民族という言葉を使っているが、中身は時代的に変わっていることの証しではないか、と思う。つまり私は民族に何か本質的に変わらないものがあるとは考えていない。どんどん変わっていくと思う。それをどう表

現するかは今のところ分からないが。

Q. イラン周辺から見て、イランおよびその民族意識は周囲にどの様にとらえられているのか。

(芦別総合技術 吉井)

A. 今ナショナリズムという表現の中で民族意識という言葉が使われたが、私はとりあえずナショナリズムという言い方をそのまま使っている。つまり、今の質問者の内容は、たとえばバシュトゥーンがイランをどう見ているか、あるいはアゼルバイジャンの人たちがどう見ているのかという話であれば、実際問題としてはいわゆる「民族」よりも、ナショナリズムという言葉で表現する「イランという国家」「アフガニスタンという国家」の枠を引きずった上での反応になると思う。それを日本語で「民族主義」という言葉で語るのは適切でないと思う。強いて言うなら「国民主義」と表現できるだろう。国家の枠を越える越えないという話だが、現代はボーダーレス時代の名を称してはいるが、それは国民国家の枠が元々高かった所の話であり、それが低くなったということである。例えば中東では、国民国家の枠はかつてよりも現在の方が遙かに高い。だからイランも以前より国民意識はずっと高まっていると思う。

Q. 民族がアイデンティティーを考える時、個々に受け継がれてきた「物語」が関わってくると思うのだがどうか。

(札幌星園 佐々木)

A. 私の基本的な考え方は、質問者の言い方になぞらえるならば、語り継ぐべきものがあるというよりも、語り継ぐべきものを作っていくことの方が強い、ということである。伝統とは作っていくものだが、意図的に作る必要があるから作っていく。例えばもし国民国家が国民としての忍耐性を維持しようとするならば、その作業が必要になる。今の様相に合わせて作っていく、ということだと思う。

Q. 「国民国家が民族にとって輓になる」の意味は何か。(札幌南 華和)

A. 国民国家が民族にとって輓になるという話は、これまでの国民国家の在り方に関わっていると思う。例えば国民国家で国民としての一体性を求められる限り、国民というの是一様であることが求められる。一様であることの中身は、例えばお互い意志を通じあえる言葉を会得している、同じ様な生活習慣を持っている、ということが要求される。最低限読み書きができるなどである。世界中で公用語というものが定められている。ある国民国家において無数に公用語を決めることは出来ない。ところが現実にはその国民国家の中には、それ以外の言語を母語としている人間はたくさんいる。ある特定の言語が公用語とされることにより、違う言語を用いる人たちが不都合がなかったにもかかわらず疎外されてしまう。

Q. ハンチントンの「西欧文明対イスラム文明の対立」という様な枠組みのたて方についての意見は。(網走南ヶ丘 横山)

A. ある文化の本質は何かという問題をたてること自体、間違っていると私は思う。文化とは常に、相互関係によってできてくる。仮にある文化とある文化が違って見えるのは今はたまたま違って見えるからかもしれない。これからずっと違って見えるというのは間違いであろう。つまり文化は常に交流がありでき上がったものだから、例えば日本文化の本質はこうだ・イスラム文化の本質はどうだ、という様に問題をたてることは間違いだと思う。西欧文明とイスラム文明がこれから相手になる、という様な問題のたて方自体が問題だろうと思う。

## 《研究発表 1》

「北方領土視察レポート ～色丹島訪問記」  
北海道根室高等学校 佐々木寿雄

平成9年8月、「ビザ無し交流」のファミリー訪問団に参加する生徒3名を引率して色丹島を訪問したときの印象をスライドを交え、紹介する。

- ・訪問団は四島が日本の領土であることに非常に気を使っている。(例えば、「入国」といわずに「入域」というなど。)
- ・根室とほぼ同じような気候で、8月でも濃霧におおわれ、肌寒い。
- ・色丹島は、四島のなかで、最も美しい自然が残っている島である。
- ・町並みは、舗装道路は一切なく、至る所に東方沖地震(1994年)の傷跡が見られる。
- ・建物はみな古いもので、きれいなものは全て日本の人道援助によるものである。
- ・ホームステイ先の家庭では、訪問団に対し、驚くほどの歓迎を示してくれた。
- ・外見は崩れそうな建物が多いが、家の中はきれいに飾られている。
- ・テレビ・ビデオやビデオカメラ・テレビゲームなどもあり驚かされた。
- ・島民は、地震被害に対する日本の援助に非常に感謝している様子で、概して、訪問団や日本に対して好意的である。
- ・ダンスやスポーツなど、自国の文化に誇りを持っている。
- ・商店では、決して豊富ではないが、予想以上の商品が店頭と並んでいた。
- ・援助などによって医療器具はあっても、故障などには対応できない状況である。(ただモノを援助するだけでは、本当の支援にはならない。)

この経験を生徒に還元したいと思っているが、世界史の授業のなかでの北方領土問題の

位置づけは難しい。世界史に限らず、他の科目のなかでも指導計画に組み込み、この問題を取り扱っていくのが今後の課題と考えている。

ビザ無し交流の推進や、政治レベルの展開をみても、領土問題は大きく進展している。根室高校生に対して行ったアンケートでも、4年前に実施したときよりも、北方領土が返還されるであろうと考える生徒が多くなっている。にもかかわらず、領土が返還されることを望む生徒が減ってきているのは、どう解釈すればいいのか。根室の経済的な問題やロシア人とのちょっとしたトラブルが影響しているのかもしれないし、元島民の減少によって全体的に関心が薄れていっているせいかもしれない。

歴史的経緯・他文化理解・地域理解など、様々な面から北方領土問題を見つめなおし、今後の展開を見守っていく必要があると痛感している。

<質疑・応答>

Q. 根室市内での返還に対する意識はどのようか。(札幌白陵 菊池)

A. 若い世代ほど意識は薄れている。元島民、あるいは元島民から直接話を聞ける立場にある人は今も返還を強く願っている。

Q. ①ロシア側の日本に対する意識はどうか。

②民間レベルの友好と政治的な領土問題は相容れないものだと思うが、それはどう思うか。(岩見沢農業 鈴木)

A. ①対話集会などは非常に形式的で、生の声は聞けなかった。島によっても違うが、色丹島は地震の際の人道援助などから日本に好意的で、返還してもよい、と考える人が多いようだ。

②政治的な問題については非常に難しい。ロシア側では民間レベルの交流を発展させた共同開発を望む声も大きい。根室側でも、領土が返還されたとしても情勢が大きく変わることはないので、積極的に返還は望ま

ず、このままでよい、と考える人もいる。

Q. ①島民の中に、ロシア人以外の北方少数民族の人々はいたか。

②島民の中には、ロシアに帰りたくても帰れない人がいると聞いたが、それはどうか。

③生徒に対するアンケートのなかで、領土返還を望む生徒の割合が減ってきているが、その理由として関心の低下以外に、例えば所有権が保証されるかどうか、日本の企業が進出して資源を枯渇させるのではないかと、といった考えもあるのではないかと。

(札幌南 橋本)

A. ①色丹島では特にみられなかった。

②交通の不便さ、あるいは給料の未払いなどの理由から、戻れない人も多いようだ。

③確かに、返還されないほうが島の自然が保たれて良い、という考えもある。

Q. 根室高校ではロシア語の授業もあるのか。

(旭川竜谷OB 中林)

A. 2単位の選択授業で行っている。

## 《研究発表2》

「世界史Aにおける年間指導計画について  
—現代史を重視した展開の一考察—

北海道美唄工業高等学校 今井一吉

### 1. はじめに

教育過程が変わり、地理歴史科の各科目にA・Bが設定されてから4年になるが、これら両科目を単に単位数の違い、あるいは「B科目は受験のため、A科目は受験を必要としない場合」といった基準で区別しているのが現状ではないかと考える。

一概に言えるものでもないが、「世界史A」という科目が設定された目的も考えた授業の展開について、一つの考えを提起したい。

### 2. 世界史Aに対する視点

①「同時代史」と「現代史」

「同時代史」とは、自分がリアルタイムで

見てきた歴史であり、「現代史」はそれ以前の歴史である。この現代史と同時代史の境目は世代によって異なっている。

②授業ではどこまで時代を進めるべきなのか。

世界史Aの授業の展開は、近現代史を中心に考えなければならないが、その際に「20世紀をどこまで進まなければならないか」という問題がおこってくる。

どこまでの年代を「歴史」とするかは、今の生徒に即したものでなければならず、1980年代前半生まれの生徒の場合、前述の同時代史と現代史の境界線は1990年前後、つまり湾岸戦争や、ソ連・東欧の変化といったあたりに引かなければならないと考える。

③前近代の部分については、思い切った精選が必要。

しかしながら、教師の側には依然として「第二次世界大戦を終われればよし」とする意識があるのではないか。2単位という限られた時間のなかで、現代史を重視した授業を展開していくためには、前近代の部分を如何に精選していくかが重要になってくる。

### 3. 具体的実践事項

#### 1 授業展開への姿勢・留意点

「近現代を精選し、現代史に多くの時間を割く」授業展開をしていく上で、本校の現状もふまえ、以下のようなことに留意している。

- ①過去の出来事が現在の自分たちの生活に多少なりとも影響を与えていることを理解させ歴史がいかに身近なものであるかを気づかせる。
- ②歴史の連続性（歴史は繰り返すこと）に気づかせる。
- ③現在の社会がどのように形成されていったかを理解する。
- ④生徒の知っていそうな事柄はあえて授業でとりあげる。
- ⑤単なる聞きっぱなしの授業に終わらず、できるだけ授業に参加させる。

### II 年間の授業計画・展開

本校では、年間の授業時数は正味45～50時間である。教科書の指導書には55～60時間を想定したモデルが記載されているが、本校の生徒の能力や集中できる度合いを考えると、さらに精選した授業計画をたてなければならない。

平成9年度は次のような方針をたてて年間指導計画を作成した。

- ①東アジア史・ヨーロッパ史をいかに簡略にするか。
- ②各地域の取扱いは、宗教や文化を前面に出す。
- ③人名・事件名はできるだけ簡略にあつかう。
- ④18・19世紀についても大きな流れをとらえさせることにとどめる。
- ⑤現代社会と重複するような事項はできるだけ扱わない。

### 4. 反省と評価

昨年度一年間で最終的に進んだのは1950～60年代であった。以下は昨年度の反省点である。

- ①各地域の文化面の扱いが十分ではなかったのではないか。
- ②前近代史は「地域」を柱に扱ったため、同じ時代の地域間の交流という面が理解させられなかったのではないか。
- ③試験では、どうしても「暗記」が中心となってしまう。自ら考えて解答できる問題も必要である。

以上の反省をもとに今年度は宗教を含め文化面に重心をおいている。2学期以降は17～18世紀の部分を整理していこうと考えている。

### 5. おわりに

現在は前近代史の精選を中心に考えているが、他にも挑戦したいことはたくさんある。「歴史は現在につながっている」ことを生徒は理解してくれているか、自分自身の感覚と生徒の感覚とのギャップを埋めていくにはどうしたらよいかなど、不安や疑問はつきない

が、「世界史A」という科目は、その新しさ故、いろいろな試みのできる可能性を秘めているのではないだろうか。

<質疑・応答>

Q. 工業高校の生徒に世界史を教える上で、特に工夫していることは何か。

(札幌厚別 井上)

A. 工業高校である以上、特に産業革命に重点を置いている。

Q. ①現代史・同時代史という区別は必要か。また、授業では同時代的なものはどう扱っているのか。

②歴史的思考力の育成について、どのような工夫をしているか。

(寿都 齊藤)

A. ①授業では最低限、現代史と同時代史の区切りまでいきたい、ということ。

同時代史を取り扱わない、ということではないが、劇的な変化に対するこちら側の評価が定まっておらず、歴史の授業でとりあげるのには難しい面もある。

②自分の考えをまとめ、自分の言葉で表現する力が乏しく、訓練が必要である。

授業のなかでの「なぜ」に答えさせたり、最近のニュースで関心のある事柄について自分の意見を述べさせたりしている。

(意見)

①他校の世界史Aの実践報告・情報交換も望みたい。

②現代史・同時代史といった時代区分はあくまで便宜的なもので常に変動している。リアルタイムの出来事は、資料が公開されていない・評価が定まっていないなどの理由から「歴史」ではない。現代社会や政治経済で扱う分野だと考える。

③歴史は繰り返さない。

④時数が少ないほど、しっかりした記述の教科書が必要なのではないか。

(留萌 櫛井)

## 《新刊紹介》

浜 忠雄著『ハイチ革命とフランス革命』

北海道大学図書刊行会(本体9600円)

当研究会第19回大会で講演をお願いした、北海道教育大学岩見沢校教授の浜忠雄氏による著作である。浜氏の論文は、これまで『歴史学研究』等の専門誌への発表が殆どであり、一般向けものとして、ここ5年くらいの間で『南北アメリカの500年(2)近代化の分かれ道』(共著、青木書店、1993年)、『講座世界史(2)近代世界への道』(共著、東京大学出版会、1995年)、『世界歴史(17)環大西洋革命』(共著、岩波書店 97年)が出版された。この度の『ハイチ革命とフランス革命』は、これまでの研究の集大成ともいえるものであり、以下の点で画期的なものである。

本書はフランス革命が植民地側から描かれている。この時期の奴隷問題を扱った研究は本場フランスでもここ10年ほどのことであり、浜氏の研究はそれに先行する30年ほど前から注目し続けていることである。さらにこのような場合、研究者向けの専門的な論文になりがちであるが、同書は一般の歴史愛好者が読んでも十分に分かりやすく、かつ綿密な資料分析が行われている点で「ハイチ」に関する国内第一級の研究書のレベルも保っている。

以下、同書の内容を簡単に紹介する。

### 【第1章】

ハイチに黒人奴隷とコーヒー・砂糖きびが導入される過程。ハイチはフランスにとって死活に関わる(輸出の36%を占める)植民地であったこと。七年戦争にかけて仏植民地の経済が仏本国ではなく外国に依存していた事実。ハイチにおける黒人奴隷のおかれた実態の詳細な資料分析。

### 【第2章】

この章と第3章では、「人権宣言」が黒人奴隷制廃止に必然的に帰結しない理由が述べられる。

①革命議会在奴隷制廃止を躊躇した理由は何か。「人権宣言は植民地にも適用されるか」「人には黒人奴隷も含まれるか」について、ロベスピエールは人権宣言と植民地の両立を主張し、「原則か植民地か」の二者択一論ではなかった。(一般的には、彼は「原則が減ぶよりは植民地が減んだほうがよい」と言ったとされてきた)。革命政府と有色自由人と黒人奴隷との関わり。

②奴隷制廃止を決断することとなった究極の要因は何か。奴隷の身分を改善しなければ、蜂起がおこることは避けられなかったこと。

#### 【第3章】

1791年8月に始まる黒人蜂起の詳しい説明。啓蒙思想家達が、現実の蜂起を目の当たりにして後退していったこと。

#### 【第4章】

『女性および女性市民の諸権利の宣言』の著者オランブ＝ド＝グージュの黒人奴隷制観について。女性として最初に「黒人奴隷制」を取り上げ、戯曲『黒人奴隷制』の上演という表現の自由と「女性の人権」をかけた闘いを紹介。

#### 【第5章】

ロベスピエール演説の分析。第2章と第3章で提起された、「人権宣言」が黒人奴隷制廃止に必然的に帰結しなかった理由の答え。「カリブ海の真珠」の死活的な重要性とこれを保持しようとする国民的要求。

#### 【第6章】

トゥサン＝ルヴェルチュールの人と思想。「黒人解放の指導者」の側面と独立後の「軍事的独裁者」をめざした両面性について。

#### 【第7章】

独立後の砂糖きびからコーヒーへの転換(トゥサンが描いた大プランテーション温存による経済再建構想と異なる)。モノカルチャー経済からの脱却がならず、食料・衣料・工業製品の外国依存により、欧米の主導する世界市場への参入と外国からの新たな干渉が

運命づけられたこと。黒人共和国であり「混血のエリート」と「黒人大衆」の対立が継続するハイチを、クリオーリョ支配のラテンアメリカ諸国が最悪の国家モデルとして切り捨て黙殺したこと。

以上である。

著者は、ハイチの現在の苦悩を描く一方、このような歴史的な犠牲を強いたフランスの植民地主義の歴史を「敗北の歴史」と見做し、残されたものは「半身不随のフランス」と断言する。

今から20数年前には、浜氏の他にはごく僅かの人の口にしか出されなかった「黒いジャコバン…トゥサン＝ルヴェルチュール」の名は、今や世界史の教科書に登場するまでになった。同書を個人で購入するには少々高価だと思う方には、学校の図書に加えて載きたいと思う。高校生にも十分理解できる配慮がある本である。

(田中一秋；札幌平岸高等学校)

## メモリーバンク 世界史問題集

B6判 198頁 索引付き  
定価 560円  
発行所 清水書院 =好評発売中=

- ① 北海道高等学校世界史研究会の会員の先生方が中心となって執筆。
- ② 定期考査から受験にまで利用できる用語問題集。
- ③ 一問一答問題で基本用語をマスター、付録のチェックシートを利用して応用問題集に変化。今日の高校生の勉強法を取り入れた画期的な問題集。

<執筆者> 赤間 幸人 川音 強 斎藤 善之  
武田 秀治 田中 一秋 華輪 健治  
真島 勝彦 毛利 慎晴 吉嶺 茂樹

## 歴史地図によるトレーニングワーク世界史

トレーニングワーク世界史編集委員会 編  
B5判 80頁 付別冊解答  
定価 450円  
発行所 山川出版社 =好評発売中=

- ◎ 北海道高等学校世界史研究会の先生方が中心となって、長年の授業体験にもとづいて作成した、地図を主体としたワークブック。
- ◎ 地図による作業と設問を通して、おのずと世界史の基礎的理解が得られるよう工夫。
- ◎ 38のテーマを設け、作業用地図98点を掲載。
- ◎ 地図使用の入試問題対策としても可能。

<執筆者>

赤間 幸人	中村 和之	味村 隆史	富森 英雄	石川 哲朗
中山 弘章	小山内 嵩	野村 秀明	亀岡 敏克	橋本 卓
菊地 守典	華輪 健治	櫛井征四郎	平山 篤夫	窪田 範孝
古木 博	小杉 俊樹	宮浦 俊明	田中 一秋	山口 博
出口 敬智	山田 淳一	鳴海 昌江	川音 強	

充実の世界史・日本史総合資料集

ニュー  
ビジュアル版 **新詳世界史図説**

ニュー  
ビジュアル版 **新詳日本史図説**

株式 株式会社 **浜島書店** 名古屋市昭和区吹上町2-26 (〒466)  
電話 名古屋 (052)733-8040(代表)

◎◎◎◎◎ **大好評** 東京法令の世界史資料集

**本当は、世界史っておもしろい!!**



**ビジュアル世界史**

AB判カラー・208ページ

大段にビジュアル化を盛り  
写真・イラストが850点



**グラフィック世界史A**

AB判カラー・142ページ

2単位A用に対応した  
近・現代中心の構成



**とうほう** 東京法令出版

●000 札幌市中央区北九条西18丁目36番03号 ☎011(640)5182  
●300 長野市南千原町1005番 ☎026(224)5411  
FAX 026(224)5419

世界が注目!  
初の全ヨーロッパ史ついに完成!

各紙誌絶賛!  
増刷出来

欧州共通教科書

# ヨーロッパの歴史

F・ドルーシユ 総合編纂 / 木村尚三郎 監修 / 花上克己 訳

EU新時代に向けてヨーロッパは過去をどのようにとらえ、  
未来をどう構築するのか? 12か国の歴史家が3年を費やして  
共同執筆したヨーロッパ全体の歴史の統一教科書の完訳。  
西洋史の枠を越えた総合的な視点からの叙述と、  
オールカラーの資料国版・地図多数。

A4変型判  
6800円  
(税込)

 東京書籍

北海道支社: 〒064 札幌市中央区南6条西14-1-5 東客ビル TEL011-562-5721

グローバルワイド

## 最新世界史図表

A B判/304頁(4色刷232頁・2色刷56頁・折込16頁)  
定価880円(本体838円)

■授業の予習・復習から大学入試対策も万全で、ビジュアル面を重視した充実タイプの図表。

楽しく学べるイラスト世界史

## 精選世界史図表 (文化圏別展開)

A B判/196頁(4色刷152頁・3色刷44頁・折込4頁)  
定価790円(本体752円)

## 総合世界史図表 (時代別展開)

A B判/240頁(4色刷184頁・3色刷56頁・折込4頁)  
定価820円(本体781円)

学習事項のまとめと整理

## 世界史Aノート

B5判/80頁/別冊解答付  
定価520円(本体495円)

学習事項のまとめと整理

## 精選世界史Bノート

B5判/96頁/別冊解答付  
定価520円(本体495円)

学習事項のまとめと整理

## 新世界史Bノート

B5判/128頁/別冊解答付  
定価550円(本体524円)

 みつめたい教育と未来  
第一学習社

〒062-0933 札幌市豊平区平岸3条5丁目4-22

☎ 011-811-1848

Fax 011-820-2422

# 【世界史研究会30周年記念シンポジウム】 のご案内

## 記念大会テーマ「世界史における民族」

期 日 平成11年8月6日(金)

会 場 札幌市教育文化会館大会議室

シンポジウム報告者(予定)

八尾師 誠 氏(東京外国語大学外国語学部教授:イラン近代史)

西山 克典 氏(静岡県立大学国際関係学部助教授:ロシア近代史)

宮崎 正勝 氏(北海道教育大学釧路校教授:中国史・世界史教育)

Richard Siddle 氏(イギリス・シェフールド大学:北海道近代史・アイヌ史)

本研究会では、30周年を記念して国際シンポジウムを企画いたしました。現在の世界史教育において、「民族問題」をどのように教えるか、は重要な問題ですが、この「民族」という言葉自体が持つ多様性が問題を複雑にしていることは、本号に記録されています。八尾師 誠先生の講演でも明らかどころです。今回のシンポジウムでは、世界史、特に近代史の中で様々な地域において、「民族」がどのように定義され、そしてどのような問題が発生し、それぞれの「民族」がどのように行動したのか、が明らかにされることと思えます。

また、特にイギリスより、Richard Siddle 氏をお招きすることができました。アイルランド問題をはじめ、「大英帝国」が様々な地域で「民族」にどのように関わってきたのか、は世界史教育の主要なテーマです。そのイギリスにおいて、主にアイヌ民族の近代史を研究されている先生の目から見て、「今日私達が教育の現場で『民族』に関わって何を教えなければならないか」という問題に関する貴重な提言が伺えることと思えます。道内多数の先生方の参加を期待いたします。(事務局)

### □ 編集後記 □

会報第6号をお届けいたします。今回の会報は若手の先生を中心に編集作業にあたりました。今年は、30周年を記念してこれまでの講演記録集の発刊も予定されています。記念大会への先生方の参加をお待ちしています。

(札幌西・吉嶺 茂樹)